

関西方言におけるデスマス体の転訛形についての試論

— 『NHK 全国方言資料』 を用いて —

村中淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

The Phrases Which Have Transformed Sounds in Polite Style of Kansai Dialect

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

Key Words: -Desu/-Masu Form, Osaka Dialect, Natural Conversation Data, Situation, Variation

1 はじめに

「でっしゃろ」「まんねん」のような、「いかにもコテコテの関西」といった感のある方言語形が存在する。これらは「そうですやろ→そうでっしゃろ」「行きますすねん→行きますんねん」のように、デスマスを含む文末表現において音声転訛現象が起きたものであるが、偶然的・臨時的に音声転訛現象が生じているのではなく、音声転訛した形が固定的・慣用的に用いられているように見える。またこの関西方言におけるデスマス体の転訛形^①は、「でっしゃろ」「まんねん」その他の形が互いに無関係に存在しているのではなく、共通する性質を持った語形群として、ある種のスタイルを形成しているように見える。

関西方言におけるデスマス体の転訛形は、関西の漫才や演劇、TV やラジオの番組等で使われることもある。関西人なら、自分ではそれらの語形を使わないとしてもどこかで聞いたことはあり、イメージの湧くものである。しかし、この「関西方言におけるデスマス体の転訛形」に焦点を当てて研究テーマとした論文は、管見のかぎりほとんど見当たらず、それらの語形の詳細な使用実態は必ずしも明らかでない。

「関西方言におけるデスマス体の転訛形」について、誰がどのように使っているか、また、どのような位置づけができるか、を明らかにすることが、関西方言に内在するスタイルのバリエーションのしくみを解明することにつながり得る^②という予測のもとに、研究を進めたい。本稿ではその一環として、まずは「関西方言におけるデスマス体の転訛形」

に関連のある先行研究についてまとめたあと、方言談話資料（『NHK 全国方言資料』第4巻 近畿編「大阪府大阪市」）を用いて、「デスマス体の転訛形」とそれに対応する「非転訛形」の出現率をみることにより、「転訛形」の位置づけを探る。

以下、2章と3章で先行研究をみた後、4章で本研究の調査方法について説明し、5章で調査結果について述べ、6章でまとめをおこなう。

2 先行研究における記述・言及

「関西方言におけるデスマス体の転訛形」を中心テーマに据えて論じた研究はほんの少数であるが、関西方言にそのような語形が存在することは、先行研究からも明らかである。

本章では、語形の存在について言及したものをみる。①概説書や辞書における記述、②論文における言及、③臨地調査の結果の一部として提示されたもの、の順である。次章で、「関西方言におけるデスマス体の転訛形」を中心的テーマとした論文を紹介する。

2.1 関西方言の概説書や辞書

関西方言の概説書においては、音声的な特徴あるいは文法的な特徴の例のひとつとして、デスマス体の転訛形が挙げられていることが多い。以下、刊行年順に、主なものを挙げる。

榎垣（1946）は京都方言の解説書であるが、音声的特徴の「促音化」の例で「イキマッサ（行きますよ）、ソードッセ（そうですよ）、アリマッサ（ありましょ）」が挙げられており（榎垣 1946 : 51）、語法の説明の助動詞のところ「ありまへん（有りません）、かきマヒョーか（書きましょか）、いきマホ（行きましょ）」が挙げられている（榎垣 1946 : 190）。

前田（1949）は大阪方言の解説書であるが、促音便の例として「そうだっか、おまっか、買いまっか、そうだっせ、おまっせ、買いまっせ」、撥音便の例として「そうだな（あ）、おまん（あ）、買いまん（あ）」が挙げられている（前田 1949 : 32-33）。そのほか助動詞「です」を取り入れた結果生じた語形として「でっさ、でっせ、でっしゃろ、でんね、でんがな」（前田 1949 : 38）、「「ます」の下に色んな助詞・助動詞が来て色んな大阪訛りを生み出す」例として、「買いまっさ、買いまんね、買いまっせ、買いまっか、買いまんのか、買いまんなあ、買いまっかいな、買いまっしゃろ、買いまへん」（前田 1949 : 228-229）、意志形として「買いまひよ、買いまほ、買いまよ、買いまお」が挙げられている（前田 1949 : 230）。^③

榎垣（1962 : 46）は近畿方言全体の特徴を解説したものであるが、その中で、丁寧の助動詞マスの未然形「マヘン」と推量形「マヒョオ」を挙げており、「見マッサ（見ますわ）・

見マッセ（見ますえ）・見マッシャロ（見ますやろ）のような粗略形⁴のあることも近畿的だろう」と述べている。

奥村（1962：286）は京都府の方言についての解説だが、マスについて「終止形のマスワ・マस्याロ・マस्याエ等が、多く山城・口丹波地方でマッサ・マッシャロ・マッセと促音化する」ことの理由として「マスの諸活用形が盛んに音変化を起こすのは、マスの表現機能がわりに軽いといえよう」と述べている。また奥村は京都と大阪の違いにも言及している。「行きマッセ（行きますよ）の如くマス・デス・ドス・オス等が、ア・ヤ・ワ行音の前にあるとき」促音化することは「京言葉の重要な特色」であるが「行きマッカ（行きますか）オマッカ（有りますか）の如きカ行音の前の促音化は綴喜郡久世郡西部の大阪弁影響地帯にのみ認められる」とのことである（奥村 1962：273）。

牧村（1979）は大阪方言の辞書であるが、「ダス」項目の解説の中でソオダンナ・ソオダッシャロなどが挙げられているだけでなく、デスについての説明もあり、ソオデンナ・ソオデッカ・ソオデッシャロの例も挙げられている。ダスにかかわりのある語形としては、ダッ・ダッカ・ダッセが立項されている。「デス」は立項されていないが、その関連語形であるデッカ・デッサ・デッシャロ・デッセはそれぞれ独立の項目として立項されている。

「マス」は立項されていないが、「マッ」は立項されており、その解説の中に「行きまっさ・書きまっさ・ありまっか・ありまっせ・ありまっしゃろ」が挙げられている。マッサ・マッセ・マヒョ・マンネはそれぞれ独立の項目として立項されている。「マヒョ」の解説の中に、マホの形に変化することが書かれている。「マンネ」の解説の中にはマンネンにもなることが書かれているだけでなく、「ナ行音の前のスは大てインに変わる」とあり、「そうだんなア、行きまんなア・そうでんな」の例が挙げられている。

比較的最近の大阪方言についての解説としては、郡（1997：43）に次の記述がある。

丁寧体としてふつうに使う助動詞は、共通語と同様の「マス」と「デス」。これに終助詞類をつけるとき、「イキマンネン（行くんです）」「イキマンナー（行きますねえ）」「イキハリマッカ（いらっしゃいますか）」「ミズデンネン（水なんです）」「ミズデンナー（水ですねえ）」「ミズデッカ（水ですか）」のように「ス」が音便化して、「ン」や「ッ」に転じることがある。ただし、こういう言い方は高年層のもの。「イキマッセー（行きますよ）」「ミズデッセー（水ですよ）」も同様。

以上、関西方言に関する解説として代表的なものと考えられる記述を挙げた。いずれも「関西方言におけるデスマス体の転訛形」の存在について記述はしているが、郡（1997）に「高年層のもの」という説明があるほかは、どのような話者が使うものであるか、という説明は見当たらない。どのような場合に使うものかという言及も見当たらない。おそらく、かつての京都や大阪では広い層に使われている普通の表現であって、話者や状況につ

いての説明を特に必要としなかったのだろうと考えられる。また転訛形が生じる原因を述べているのは奥村（1962）のみであるが、「マスの表現機能がわりに軽いため」に「盛んに音変化を起こす」と説明しているのは、注目される。

2.2 関西方言に関する論文

次に、関西方言に関する論文の中から、これらの語形についての説明を探すと、山本（1966）に次の記述がある。

大阪方言一般においては、未然形「-マへん」、推量形「-マッしゃろ」、意思形「-マシヨウ」>「-マヒョウ」「-マホ」などがよく用いられるのであるが、女子学生にあっては、ほとんど用いられない。（中略）。終止形・連体形にヤ・タ・カ・ナ行ではじまる語が下接すると、大阪方言一般ではス語尾が拗音化（行きマスやろ（う）>行きマッしゃろ（う））、促音化（行きマスとき>行きマツとき、行きマスか>行きマツか）、撥音化（行きマスのん>行きマンのん）するケースが多くみられるが女子学生にあっては、これらの現象もほとんどみられない。（中略）。大阪方言一般にみられる「-デン ねん」、「-デン のん」というようなス語尾の撥音化や、「-デッしゃろ」というような拗音化現象は女子学生にはみられない。^⑤

すなわち、山本（1966）によれば、当時、「デスマス体の転訛形」は大阪方言一般として使われていたが、女子大学生においては使用がなかった、ということである。

金沢（1987）では、1987年当時の漫才コンビ（太平サブロー・シロー）の漫才において「まっか」「でっしゃろ」「でんがな」の語形が笑いのネタとなっていることを示し、それらの語形がすでに若者にとっては古臭い印象のものになっていると解説している。

2.3 関西方言の臨地調査

「デスマス体の転訛形」が調査項目に含まれた臨地調査に、次のものがある。

岸江・中井・鳥谷（2001）は、大阪府下全域 161 地点、各地点 1 名ずつの、70 歳以上の話者への調査結果が地図化されたものである（調査は 1990～1993 年）。「デスマス体の転訛形」にあたる項目としては「行きまんのん」「行きまっか」「そうでっか」「そうだっしゃろ」の 4 つがある。結果をみると、「行きまんのん」は話者の半分弱、「そうだっしゃろ」「行きまっか」は約半数、「そうでっか」は約 6 割が「使用する」と答えている。

田原・村中（2002）は、東大阪市の20代～60代の話者53名に調査した結果をまとめたものである（調査は1998年）。「デスマス体の転訛形」にあたる項目としては「そうでんねん」「行きまんねん」の2つがある。いずれも、男性の6割、女性の2割が使用すると答えており、世代は40代以上が中心で、30代はやや少なく、20代はゼロであった。

以上、本章でみてきたところをまとめると、「関西方言におけるデスマス体の転訛形」は、20世紀なかばまでは、関西方言としてごく普通の、誰でも使う語形として記述されてきたとあってよいだろう。それが20世紀後半になって、若年層は使わず、高年層の使う語形と記述されるようになってきた。方言臨地調査の結果からみると、20世紀末において、関西方言の高年層話者あるいは中高年層の話者が「デスマス体の転訛形」を使用していた（少なくとも、使用するという意識を持っていた）ことがわかる。

また、先行研究から考えると、関西らしさを感じさせる「関西方言におけるデスマス体の転訛形」は、「ス語尾の促音化」「ス語尾の撥音化」「否定形もしくは意志形におけるサ行子音の摩擦の弱化（セン→ヘン→エン、ショ→ヒョ→ホ→オ）」という3種の現象に集約されるといってもよさそうである。

3 「関西方言におけるデスマス体の転訛形」を中心的テーマとした論文

本章では、「関西方言におけるデスマス体の転訛形」を中心的テーマに据えた、筆者の論文を紹介する。

まず、村中（2004）がある。ただしこの論文では、転訛形と非転訛形とをまとめて扱っている。すなわち、「デス・マスあるいはその活用形に文末助詞等のついたもの（デスナ、マセンナ、マシタナ、マシヤロ、マスネン等）」と「デス・マスの活用形に大阪方言独特の音訛のあるもの（マヘン、デッシヤロ、デッセ、マッカ等）」とをまとめて「デスマス+ α 」と呼び、それらが「中高年男性語」であるかどうかを、田辺聖子の小説6本（シリーズとしては3つ）を材料として調べ、次のような結論を導き出している。

- ① 「デスマス+ α 」は、中高年男性が主として使う語形である。
- ② 「デスマス+ α 」は、若年男性の場合、デスマスを使うべき相手に対して使うと、大人っぽい練れた話し方となり、デスマスを本来使うべきでない相手に対して使うと、からかいや嫌味のニュアンスになる。
- ③ 「デスマス+ α 」は、若年女性が使った場合は、ジョークとしての使用となる。

次に、村中（2009a）と村中（2009b）がある。この2本はいずれも「言葉の加齢変化」をテーマとした科研におけるインタビュー調査の結果をまとめたものである。この2本においては、上記の村中（2004）とは異なって、転訛形と非転訛形を区別しており、非転訛形

を日常的ツール、転訛形を非日常的ツールと位置づけている。転訛形については、インタビューされた話者のコメントによれば、「濃い大阪弁」「ベタな喋り方」「いわゆるコテコテ」「大阪弁の強烈バージョン」であるということであり、話者にとっても1つのグループをなす語形群と意識されていることが伺えた。転訛形は、自分自身が日常的なふだんのことばとして使うわけではないとしても、子供の頃から大量のインプットが有るために、使いこなしへの道は開かれているものと思われた。転訛形・非転訛形ともに、中年イメージを伴うものであるが、子供の頃から潜在的レパトリー^⑥として内在しており、実際に中年に近い年齢になると使いこなしが促進されるものであると考察している。

筆者のもの以外にも「関西方言におけるデスマス体の転訛形」を中心的テーマとして扱った論文があるのではないかと考えて探したが、今のところ見つけることができていない。

上記に挙げた筆者の論文が何をどう分析したかまとめると、村中(2004)は小説を材料として、「デス・マスあるいはその活用形に文末助詞等のついたもの」の出現する文脈と、作家の描写する使用者の属性から、語形の性質について考察したものであった。これは「転訛形」と「非転訛形」を区別しない分析であった。村中(2009a)・村中(2009b)は、関西方言話者へのインタビュー結果を検討することにより、話者から見た「関西方言におけるデスマス体の転訛形」の位置づけを分析したものであった。この2本は「転訛形」と「非転訛形」を区別しているが、各々の出現の割合はみることのできない方法であった。^⑦

本稿においては、「転訛形」とそれに対応する「非転訛形」の出現率を見ることにより、「関西方言におけるデスマス体の転訛形」についての考察を深めたい。出現率を調べるには、談話資料を用いることが有効である。そこで本稿では、既成の方言談話資料である『NHK 全国方言資料』第4巻 近畿編「大阪府大阪市」を用いて検討することにした。『NHK 全国方言資料』には自由会話と場面設定会話収められており、場面差という観点から、転訛形と非転訛形の出現率をみることもできそうだというメリットもある。

4 調査方法について

4.1 調査対象資料

『NHK 全国方言資料』第4巻近畿編「大阪府大阪市」を対象とする。^⑧

談話内容は「自由会話1 年末年始の話」「自由会話2 天神まつりの話」「あいさつ(1朝, 2ゆうべ, 3道で, 4買物, 5送り, 6迎え, 7不祝儀, 8祝儀)」に分かれる。

録音収録日は、1953年11月22日。

話者は、牧村史陽氏(1898年生)と入江ゆき氏(1888年生)。収録当時の年齢は、牧村氏55歳、入江氏65歳と推定される。『NHK 全国方言資料』の注記によれば、両者とも古

い大阪を代表する地域と考えられる「中船場」の出身者であり、牧村氏は僧侶、入江氏は画家夫人となっている。『大阪ことば事典』の著者紹介によれば、牧村氏は大阪船場の木綿問屋の長男に生まれて大倉商業卒業後、父の死を機に家業を別家に譲って郷土史研究に打ち込んだということである。

話者同士の関係については不明。同じ中船場出身とのことであるが、談話の内容から判断すると、少なくとも昔なじみではないようである。「自由会話」では、入江氏が牧村氏に向かって「アタシヨリ オワカイヨッテニ（あなたは私よりも若いから）」というくだりがあるものの、ほぼ同じ世代の大阪の古い文化を共有するものとして、和やかに、時に盛り上がりつつ、話を進めている。両者とも主にデスマス体で話している。「あいさつ」は、場面や役割を設定して演じる会話であり、少し固さの感じられる部分もあるが、円滑に進んでいる。あらかじめ打ち合わせをして、近所の知り合い同士、店の主人と客、夫婦、などの設定をよくのみ込んだ上で話しているようすが伺える。

4.2 調査項目

投稿中の論文（注7参照）においては、「関西方言におけるデスマス体の転訛形」として「でんな、まんな、でっしゃろ、まっしゃろ、でんねん、まんねん、まへん、まひよ、でっか、まっか、でんがな、まんがな、でっせ、まっせ」の14語形を検索対象と定めた。

しかし本稿では、できるだけ網羅的に語形を拾い上げるため、あらかじめ対象の語形を限定するのではなく、文字化資料の中から、デス・マス体に相当するものに文末助詞等が接続した表現を探して抜き出す、という方針をとった。

4.3 調査手順

次の（1）（2）（3）の手順で進めた。

（1）文字起こし資料の確認。

『NHK 全国方言資料第4巻近畿編』「大阪府大阪市」の文字化資料を見ながら音声を聞き、微妙な部分を何度も聞き直した。『NHK』のテキストをできるだけ尊重しつつ、何度聞いても違うように聞こえるところだけ、修正を加えた。『NHK 全国方言資料』の文字化資料については、山口幸洋氏編纂の修正テキスト集があり、その中に井上文子氏執筆の「大阪府大阪市」の修正テキストがある。井上氏のテキストも参考にし、食い違うところは繰り返し聞き直した。微妙な部分・食い違っている部分というのは、だいたいにおいて話者が早口になっていたり、2人の話者の声が重なっていたりするところである。聞き取りに当たっては、まずCD-ROMの音声を聞き、その後、カセットテープの音声を聞いた。⁹⁾

(2) 該当語形の抜き出し.

デス・マス体に相当するものに文末助詞等が接続した表現を抜き出した.

「デス・マス体に相当するもの」としては、次のものがあった.

- ・デス, マス, ダス, ドス, ゴザイマス, ゴザリマス, ゴワス, ヤス
接続した文末助詞等には, まず「-ス」形に接続するものとして, 次のものがあった.
- ・終助詞類 ナ, ネ, カ, カイナ, エ, ワ, ガナ, ガ (ガナと同様のニュアンスのもの), ノン, モン, ナヤ (禁止命令), イナ
- ・接続助詞類 ケレドモ類 (ケレドモ, ケド), サカイニ類 (サカイニ, サカイ), ヨッテニ類 (ヨッテニ, ヨッテ), ノデ類 (ノデ, ノンデ), シ, デ (終助詞デとは異なる)
- ・助動詞類 ヤ (指定辞), ヤロ, ヤン, ネン類 (ネン, ネヤ, ノヤ, ネ)
- ・形式名詞 コト, モン
「-ス」形ではなく, 活用した形に助動詞が接続したものとして, 次の語形を取り上げた.
- ・マセン>マヘン, マセナンダ>マヘナンダ, ゴワセン>ゴワヘン, マショカ>マヒョカ

次の語形は取り上げていない.

- ・「-ス」形で文が終わるもの
- ・デシタ, マシタ, ゴワシタ, マシテ, などに文末助詞等がつくもの⁽¹⁰⁾

(3) 表作成.

(2)の作業で抜き出したものを Excel の一覧表にした(本稿末尾に 11 頁にわたり掲載). 一覧表には, 談話の種類, 『NHK』における掲載頁, 話者 (f と m で表した), 抜き出した文節 (修正済みのもの), その文節の機能語部分の原形 (非転訛形), 転訛のタイプ, 等を記入した. 備考欄に, NHK テキストおよび井上氏テキストとの異同や, 微妙な聞こえについての情報を載せた. ただし文末の長音の異同については (「ナー」と「ナ」等), 今回の分析対象としないので特に注記せず, 基本的に NHK テキストのままにしている.

5 結果と考察

まず語形ごとに「転訛形」の出現率を示す. その後, 転訛タイプによる違い, 後続音節による違い, 場面による違いを検討し, 「転訛形」の出現しやすさに関わる要因を考える.

転訛タイプは, 2 章の最後で述べた「ス語尾の促音化」「ス語尾の撥音化」「否定形もしくは意志形におけるサ行子音の摩擦の弱化」の 3 分類とする.

5. 1 語形ごとの「転訛形」出現率

ゴザイマス類, ゴワス類, ダス類, ドス類, デス類, マス類, ヤス類の順にみていく。
 まずゴザイマス類 (ゴザイマスとゴザリマス) を転訛タイプ別に集計する。

表1 ゴザイマス・ゴザリマス類

転訛のタイプ	転訛の数	転訛の割合	具体的語形の原形
促音化	4/13	0.31	ゴザイマスケレドモ 2, ゴザイマスサカイニ 1, ゴザイマスヤロ 4, ゴザイマスヨッテニ 1, ゴザイマスワ 1, ゴザリマスエ 1, ゴザリマスヤロ 1, ゴザリマスヨッテニ 1, ゴザリマスワ 1
撥音化	0/5	0	ゴザイマスネン 1, ゴザイマスノデ 1, ゴザリマスネン 1, ゴザリマスノデ 1, ゴザリマスノンデ 1
サ行弱化	3/6	0.5	ゴザイマセン 5・ゴザイマセナンダ 1
計	7/24	0.29	

(割合は、小数点以下第3位を四捨五入した。このあとの表においても同様。)

表の示し方を説明すると、たとえば上記の「促音化」の「転訛の数」が4/13となっているのは、ゴザイマスあるいはゴザリマスに文末助詞類が後続したもののうち、「ス」が「ッ」になり得るものが13件あり、その中で実際に「ッ」と発音されたものが4件であった、ということである。「具体的語形の原形」の中の数字は、それぞれの件数である。

数が少ないので断言できないが、次のような傾向はある。

まず、促音化については、ヤロが後続してマッシャロになる場合だけ、起きた。

撥音化はゼロである。ゴザイマス類には撥音化が起きにくいかもしれない。

サ行弱化は、ゴザイマセンで終わるときは起こらず、ゴザイマヘナンダとかゴザイマヘンデッカイナーのように続くときに起こりやすいようである。

同じものを、ゴザイマスとゴザリマスとに分けて数えると、次のようになる。

表2 ゴザイマス類 対 ゴザリマス類

	促音化	撥音化	サ行弱化	計
ゴザイマス類	3/9	0/2	3/6	6/17
ゴザリマス類	1/4	0/3	0/0	1/7
計	4/13	0/5	3/6	7/24

ゴザリマスは、ゴザイマスに比べてどのタイプの転訛も起きにくい傾向があるといえるかもしれない。

次にゴワス類を転訛のタイプ別に集計する。

表3 ゴワス類

転訛のタイプ	転訛の数	転訛の割合	具体的語形の原形
促音化	2/5	0.4	ゴワスエ1, ゴワスワ4
撥音化	4/4	1.0	ゴワスナ2, ゴワスネン1, ゴワスノヤ1
サ行弱化	2/2	1.0	ゴワセン2
計	8/11	0.73	

(割合は、小数点以下第3位を四捨五入した。)

ゴワス類は全体に転訛率が高いといえよう。件数はごく少ないが、撥音化とサ行弱化の割合は100%である。

次はダス類である。これは1例しか無かった。転訛が起きてダッセとなっている。

表4 ダス類

転訛のタイプ	転訛の数	転訛の割合	具体的語形の原形
促音化	1/1	1.0	ダスエ1

次はドス類である。これは2例だけで、いずれも転訛は無し。

表5 ドス類

転訛のタイプ	転訛の数	転訛の割合	具体的語形の原形
促音化	0/2	0	ドスカ1, ドスワ1

ドスワは音声環境的には転訛の可能性はあるが、慣習的には転訛しないものなのかもしれない。またこのドスワ(表の連番65)は表の備考に書いた通り、デスワにも聞こえるような、やや微妙なものであった。

ドスカ(表の連番50)は慣習的にも転訛しうらと思われるので、この例ではたまたま転訛しなかったものであろう。

次はデス類である。件数が多いので、原形ごとに細かく集計してみる。

表 6 デス類

転訛のタイプ	原形	転訛の数	転訛の割合
促音化	デスヤロ 5	5/5	1.0
	デスサカイ 1	1/1	1.0
	デスヤン 1	1/1	1.0
	デスカ 19, デスカイナ 1	18/20	0.9
	デスエ 10	8/10	0.8
	デスケド 4, デスケレドモ 1	2/5	0.4
	デスヨッテ 1, デスヨッテニ 3	1/4	0.25
	デスイナ 1	0/1	0
	デスワ 9	0/9	0
撥音化	デスガ 4, デスガナ 4	8/8	1.0
	デスネヤ 1, デスネン 1, デスノヤ 2	3/4	0.75
	デスナ 16	8/16	0.5
	デスネ 1 *	0/1	0
計		55/85	0.65

(*の「デスネ」のネは、ネンの短い形ではなく、ナ行文末詞のネである。)

デッサロ (<デスヤロ)・デッカ (<デスカ)・デッセ (<デスエ) は、促音化するほうが通常の形といえるかもしれない。

デスワ (>デッサ) は、促音化し得る環境だと思われるのだが、今回の資料では促音化する例がなかった。

デンガ (<デスガ)・デンガナ (<デスガナ) は、撥音化するのが通常形である可能性がある。

ネン類 (ネン, ネヤ, ノヤ) がついた場合は、デンネヤのように撥音化しやすいようである。

デンナ (<デスナ) は撥音化する場合としない場合が拮抗している。

次はマス類である。これも原形ごとに細かく集計する。

表7 マス類

転訛のタイプ	原形	転訛の数	転訛の割合
促音化	マスエ 1	1/1	1.0
	マスカ 2	1/2	0.5
	マスヨッテ 1, マスヨッテニ 1	1/2	0.5
	マスワ 9	4/9	0.44
	マスヨーナ 1, マスヨーニ 4	0/5	0
	マスケド 1, マスケレドモ 2	0/3	0
	マスシ 1	0/1	0
撥音化	マスネヤ 1, マスネン 3, マスノヤ 1	4/5	0.8
	マスノンデ 1, マスノンデス 1	0/2	0
	マスモンデ 1	0/1	0
	マスデ 9	0/9	0
サ行弱化	マショカ 1, マセン 7	8/8	1.0
計		19/48	0.40

マスワがマッサと促音化する割合が半数近いことと、マスにネン類が後続した場合の撥音化の割合が高いこと、またサ行弱化は100%であることが目につく。

次はヤス類である。オコシヤス・オクレヤスなどのように「オ」と「ヤス」で動詞の連用形を挟む尊敬語の「オ～ヤス類」とマス由来の丁寧語の「ヤス類」に分けて示す。

表8 オ～ヤス類（尊敬語）

転訛のタイプ	原形	転訛の数	転訛の割合
促音化	オ～ヤスヤ 1	1/1	1.0
	オ～ヤスカ 2	1/2	0.5
	オ～ヤスコト 1	0/1	0
撥音化	オ～ヤスノンデ 1	1/1	1.0
	オ～ヤスナ 6, オ～ヤスナヤ 1	2/7	0.29
	オ～ヤスネン 1	0/1	0
計		5/13	0.38

それぞれの件数が少なく、確たることは言いにくい。促音化 (2/4) のほうが撥音化 (3/9) よりも起きやすいという傾向はあるかもしれない。

表9 ヤス類（「マス」由来の丁寧語）

転訛のタイプ	原形	転訛の数	転訛の割合
促音化	ヤスヤロ 1	1/1	1.0
	ヤスワ 2	2/2	1.0
撥音化	ヤスナ 1	1/1	1.0
	ヤスネヤ 2, ヤスノヤ 1, ヤスネン 8 ⁽¹⁾	8/11	0.73
	ヤスモン 1	0/1	0
計		12/16	0.75

尊敬語の「オ～ヤス類」に比べると、マス由来の丁寧語ヤスは全体に転訛形になる割合が高い傾向にある。促音化も撥音化も盛んである。

5. 2 転訛タイプによる差

前節では語形ごとに分けて作表したが、次にそれらを1つにまとめた表を示す。

表10 「ス」を含む語形のタイプと転訛タイプの関係（割合が0.6以上のセルに網掛）

	促音化	撥音化	サ行弱化	計
ダス類	1/1(1.0)	0	0	1/1(1.0)
ヤス類	3/3(1.0)	9/13(0.69)	0	12/16(0.75)
ゴワス類	2/5(0.4)	4/4(1.0)	2/2(1.0)	8/11(0.73)
デス類	36/56(0.64)	19/29(0.66)	0	55/85(0.65)
マス類	7/23(0.30)	4/17(0.24)	8/8(1.0)	19/48(0.40)
オ～ヤス類	2/4(0.5)	3/9(0.33)	0	5/13(0.38)
ゴザイマス類	3/9(0.33)	0/2(0)	3/6(0.5)	6/17(0.35)
ゴザリマス類	1/4(0.25)	0/3(0)	0	1/7(0.14)
ドス類	0/2(0)	0	0	0/2(0)
計(割合)	55/107(0.51)	39/77(0.51)	13/16(0.81)	107/200(0.54)

全体にならしてしまうと、促音化と撥音化は2件に1件の割で起きている。

件数が比較的多いものの中で促音化が起きやすいのはデス類、撥音化が起きやすいのはデス類とヤス類である。サ行弱化は、件数が少ないが全体に起きやすいと言える。

音声転訛が起きやすいとよい語形はデス類、ヤス類、ゴワス類、である。マス類はサ行弱化は起きやすいが、促音化・撥音化はさほどでもない。

5. 3 後続音による差

ここまで、「ス」語尾を含む語形で分類してきたが、本節では、「ス」語尾の後続語形による集計をおこなう。その前に、2章に挙げた先行研究から、転訛する部分と後続音と転訛タイプとの関係をおおまかにまとめると表11のようになる。

表11 後続音と転訛タイプとの関係（先行研究より）

転訛する部分	後続部分の最初の音	転訛タイプ
マス・デス・ドス・オス等の 「ス」	ア・タ・カ・ヤ・ワ行音	促音化
	ナ・ガ行音	撥音化
マスの活用形に含まれる [s]	[e] [jo]	サ行子音の 摩擦の弱化

今回の資料を使って「ス」語尾の後続語形による集計をしたものが表12である。合計数が4以下のものは省いた。

表12 「ス」後続語形ごとにみた転訛形（割合が0.6以上のセルに網掛）

	後続語形	促音化	撥音化	サ行弱化	その他	転訛無	計
ア行	エ	11			1	2	14
カ行	カ, カイナ	20				5	25
	ケド, ケレドモ	2			2	6	10
ヤ行	ヤロ, ヤ, ヤン	12				1	13
	ヨッテ, ヨッテニ	2			2	4	8
	ヨーニ, ヨーナ					5	5
ワ行	ワ	7				20	27
ナ行	ナ		12		2	11	25
	ネン類		17		1	7	25
	ノ類		1		2	5	8
ガ行	ガ, ガナ		8				8
ダ行	デ					9	9
	(セ)ン			11		3	14

(サ行弱化で「ヒョ」「ホ」となるものは、今回の資料にはなかった。)

エは、デッセ、マッセ、のように転訛形になるのが基本的といえそうである。

カ行で始まる語形の場合、カ・カイナは促音化することが多いが、ケド・ケレドモはさほどでもない。

同じヤ行音で始まる語形であっても、ヤロ・ヤ・ヤンは転訛形が基本だが、ヨッテ・ヨッテニはさほど転訛形が使われず、ヨーニ・ヨーナは転訛しないのが普通のようなのである。

ワは、マッサのように転訛形になることもあるが、マスワ・デスワのように転訛しない形で使われるほうが多い。

ナ行で始まる語形の場合、いわゆるナ行文末詞のナは約半数が撥音化していた。ネン類（ネン・ネヤ・ノヤ）は多くが撥音化する。ノ類（ノデ、ノンデ、ノンデス）はほとんど撥音化しない。ノ類のその他の2件は、ノ自体が撥音化するために、スの撥音化が起こらないものである。

ガ・ガナは基本的に撥音化するようである。

デは撥音化しない。このデは、「イタダキマスデゴザイマス」「モーシアゲマスデゴザリマス」のように、後ろにゴザイマス類が接続するもので、相当に丁寧な話し方をする際に出現するものようである。

スの後ろに否定のンがついてセンになる場合は、ゴザイマス類であっても無くても、マヘンとなり、サ行の摩擦が弱化するのが基本的なようである。

5. 4 場面による差

場面（談話の種類）ごとに、転訛可能部分で転訛しない割合を出すと次のようになる。

表 13 場面ごとの転訛しない割合（カッコ内は割合）

設定	場面	転訛しない数/転訛可能部分の数
設定なし (自然会話)	自由会話 1	15/45 (0.33)
	自由会話 2	9/29 (0.31)
近所の人	あいさつ・朝	4/15 (0.27)
	あいさつ・夕	14/22 (0.64)
	あいさつ・道	9/15 (0.6)
近所の人	あいさつ・不祝儀	10/15 (0.67)
	あいさつ・祝儀	12/19 (0.63)
店の主人と客	あいさつ・買物	7/20 (0.35)
夫と妻	あいさつ・送り	3/10 (0.3)
	あいさつ・迎え	3/12 (0.25)

表 13 を見ると、転訛しない割合の数値は、2つのまとまりに分けられる。網掛けをかけた部分、すなわち 60%台の場面と、25～35%台の場面である。

ここから推測されるのは、デスマス体で話す場合に、転訛しない割合が 25～35%台というのがふだんの話し方、転訛しない割合が 60%台というのが改まった話し方、なのではないかということである。しかし、「近所の人を相手に話す」という同じような設定であるにもかかわらず、「夕」「道」に比べて「朝」はなぜ転訛率が高いのだろうか。「朝」には「ソーデッカ」「サイデッカ」「ソーデンナー」という転訛形を含む相づちが多く出現しているためかとも思われるが、今後、資料を増やして検討していくべきところであろう。

6 まとめ

以上、本稿では、「関西方言におけるデスマス体の転訛形」に関連のある先行研究についてまとめたあと、『NHK 全国方言資料』「大阪府大阪市」を資料として用いて、「デスマス体の転訛形」とそれに対応する「非転訛形」の出現率をみた。

まず先行研究からは、「関西方言におけるデスマス体の転訛形」を、「ス語尾の促音化」「ス語尾の撥音化」「否定形もしくは意志形におけるサ行子音の摩擦の弱化」という3つのタイプの現象に集約できた。

今回の資料の分析結果をまとめると次の通りである。

転訛形のタイプ別に見ると、「否定形もしくは意志形におけるサ行子音の摩擦の弱化」は起きる頻度が8割以上と高かった。「促音化」と「撥音化」はいずれも5割程度の出現頻度であった。つまり、あくまでも今回扱った資料の範囲（20世紀初頭の大阪船場のことばにおいて）ではあるが、「サ行子音の摩擦の弱化」と、「撥音化」「促音化」とは、異なる位置づけができるかもしれない。すなわち、「サ行子音の摩擦の弱化」の出現は話し相手や状況に依存せず、通常よく生じるものであったが、「撥音化」「促音化」の出現は話し相手や状況との関係に依存するものであった、という可能性がある。であるならば、「撥音化」「促音化」の出現の要因をつきとめる必要がある。

1つの要因として、丁寧さの度合いが下がると転訛が起きやすい、ということは言えるだろう。根拠は次の通りである。

- ① 尊敬語の「オ～ヤス類」よりも、マス由来の丁寧語ヤスに転訛が起きやすかった。
- ② ゴザリマスよりも、ゴザイマスに転訛が起きやすかった。
- ③ ゴザイマスよりもゴワスに転訛が起きやすかった。
- ④ マスよりもヤスに転訛が起きやすかった。
- ⑤ ゴザリマス>ゴザイマス>ゴワス、マス>ヤス、の順で語形のもつ丁寧度が下がると見なせる。したがって、丁寧度の低下が「撥音化」「促音化」の転訛を引き起こすといえそうである。

このことは、奥村（1962）が「マスの表現機能がわりに軽いため」に「盛んに音変化を起こす」と説明していたこととも、符合する。

今回の結果からもう1つ言えるのは、「関西方言のデスマス体の転訛形」に関する位置づけが、現代と、数十年前とは異なるのではないか、ということである。

ス語尾を含む語形別に見ると、促音化が起きやすいのはデス類、撥音化が起きやすいのはデス類・ヤス類・ゴワス類であった。後続語については、後続語の語頭音がヤ行音・カ行音・ナ行音であるといった音声的レベルではなく、語形のレベルで転訛形の生じやすさが異なっていた。具体的には、「エ」「ヤロ・ヤン・ヤ」「ガナ」は転訛形が基本的であり、「ネン類」「カ・カイナ」は転訛形が多かった。

このことから、次のようにいえるだろう。

現代的視点からは、「でっしゃろ」「まんねん」その他の転訛形が互いに無関係に存在しているのではなく、共通する性質を持った語形群として、ある種のスタイルを形成しているようにみえるが、少なくとも今回の資料からは、一まとまりの語形群とは見なせない可能性がある。

また、つぎのこともいってよいだろう。

現代的視点からは、偶然的・臨時的に音声転訛現象が生じているのではなく、音声転訛した形が固定的・慣用的に用いられているようにみえるが、少なくとも今回の資料においては、偶然的・臨時的な部分も相当程度あるように思われた。

このことの根拠としては、微妙な聞こえのものがあつたこともあげられる。一覧表に記入した通り、連番13（ゴワスエ/ゴワッセ）、連番78（ヤスカ/ヤッカ）、連番84（マスヨッテ/マッシュョッテ）、連番165（マスワ/マッサ）や、またスがフに近く聞こえたり、スの摩擦が非常に弱かったりするいくつもの例があつた。

つまり、数十年前の大阪における「関西方言のデスマス体の転訛形」は、「サ行子音の摩擦の弱化」はごく普通のことであり、また「促音化」と「撥音化」は丁寧度がやや落ちるときに臨時的に起き得る現象であつて、転訛しないものとの違いは大きくなかつた、という可能性がある。今回の資料と現代との間に採集された資料を調べる必要があるだろう。

7 おわりに

今後、同様の方法によって、『NHK 全国方言資料第4巻 近畿編』における大阪以外の地点や、国立国語研究所の『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』の第13巻「大阪・兵庫」・第11巻「京都・滋賀」・第12巻「奈良・和歌山」なども対象として、「デスマス体の転訛形」をさらにくわしく調べていきたい。

注

- (1) 「転訛形」という呼び方はボイクマン (2010) を参考にした。すなわち、「縮約形」や「拡張形」という名称は語の拍数の変化に呼び方を依存することになり、「くだけた表現」という名称は、語のニュアンスをあらかじめ決めつけてしまうことになり、それぞれ不都合がある。そこで、そのような不都合の無い「転訛形」という名称を用いることにする。
- (2) 方言対共通語、カジュアル対フォーマル、といった2項対立ではなく、複数のスタイルと場面との関係、複数のスタイルと話し手の意識との関係、といった複雑な絡み合いが予測される。
- (3) 楳垣 (1946) と前田 (1949) からの引用に際しては、原典の旧仮名遣いを新仮名遣いに改めた。
- (4) 楳垣のいう「粗略形」は、本稿の「転訛形」と同じものを指していると思われる。
- (5) 村中 (2004) において、同じ部分を要約引用し、山本俊治 (1965) としているが、山本俊治 (1966) の間違いである。
- (6) 「潜在的レパートリー」については渋谷 (2008) に詳しい説明がある。
- (7) これらのほかに、国会会議録を資料として「関西方言におけるデスマス体の転訛形」について考察した論文を、ある雑誌に投稿中である。ただしその論文においては、「デスマス体の転訛形」のみを扱っており、「転訛形」と「非転訛形」の出現率は出していない。
- (8) 本稿は、方言談話資料を用いて「関西方言におけるデスマス体の転訛形」を調べるための方法論を開発するという意味もあり、扱う資料を『NHK 全国方言資料』「大阪」のみにとどめた。
- (9) 本稿においては、筆者のみの聞き取りによってテキスト修正をおこなっているが、新田 (2004) においておこなわれているように、談話の話者に近い年代のネイティブに協力をあおぐのが、より望ましい方法であると思われる。
- (10) 促音化や撥音化の可能性は無さそうなので取り上げていないが、「-シタ」「-シテ」のシの摩擦が弱まってヒに近い音になる可能性は考えられる。
- (11) ヤスネン 8 件のうち 1 件は、ヤスがヤフと発音されており (表の連番 49) , 現象としてはサ行の弱化である。しかし、マヒョやマヘンとは異なり、話者の発音意識がおそらくマスであると思われるため、転訛タイプを「サ行の弱化」とはせず、撥音化しそうでしなかったものと見なした。

参考文献

- 井上文子, 1995, 「大阪府大阪市」山口幸洋編・監修『NHK 全国方言資料研究テキスト(3)』静岡大学人文学部山口研究室発行.
- 榎垣実, 1946, 『京言葉』高桐書院.
- 榎垣実, 1955, 『船場言葉』近畿方言学会.
- 榎垣実, 1962, 「近畿方言総説」『近畿方言の総合的研究』三省堂.
- 奥村三雄, 1962, 「京都府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂.
- 金沢裕之, 1987, 「落語の上方弁と漫才の上方弁」『国文学解釈と鑑賞』52-7: 106-113.
- 岸江信介・中井精一・鳥谷善史, 2001, 『大阪府言語地図』近畿方言研究会.
- 郡史郎, 1997, 「大阪方言の特色」『大阪府のことば』明治書院.
- 渋谷勝己, 2008, 「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『月刊言語』37-1: 18-25.
- 田原広史・村中淑子, 2002, 『東大阪市における方言の世代差の実態に関する調査研究 2 -待遇表現-』平成9・10年度東大阪市地域研究助成金研究成果報告書2.
- 新田哲夫, 2004, 「NHK 全国方言資料(石川県石川郡白峰村白峰)改訂と注釈」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』24: 29-63.
- 日本放送協会編, 1981, 『カセットテープ 全国方言資料』日本放送出版協会.
- 日本放送協会編, 1999, 『CD-ROM 版 全国方言資料』日本放送出版協会.
- ボイクマン総子, 2010, 「丁寧体の会話における日本語母語話者の音声転訛」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』25: 17-35.
- 前田勇, 1949, 『大阪弁の研究』朝日新聞社.
- 牧村史陽, 1979, 『大阪ことば事典』講談社(参照したのは1984年講談社学術文庫版).
- 村中淑子, 2004, 「大阪方言におけるデス・マス+文末詞—中高年男性語かどうかの検討—」『静岡・ことばの世界』6: 18-30.
- 村中淑子, 2009a, 「関西方言および女性語」『加齢による社会活動の変化にともなう言語使用の変化に関する研究 平成18~20年度科学研究費補助金(萌芽研究)研究成果報告書(研究代表者 尾崎喜光)』5-17.
- 村中淑子, 2009b, 「関西方言の文末表現について—個人言語と年齢アイデンティティーとの関連—」『徳島大学国語国文学』22: 89-96.
- 山本俊治, 1966, 「女子学生の方言意識とその実態(3)・大阪方言を素材として」『武庫川女子大学紀要人文科学篇』13号(『日本列島方言叢書16 近畿方言考4(大阪府・奈良県)』ゆまに書房1996所収).

【資料】

『NHK 全国方言資料』 「大阪市」におけるデスマス体の転訛形・非転訛形 一覧

連番	談話の種類	頁	話者	語形	原形	転訛	備考
1	自由1	190	m	ナンデンナー	デスナ	ん	
2	自由1	190	f	セワシナイコッテンナー	テスナ	ん	
3	自由1	190	f	ジッキデンガナ	デスガナ	ん	
4	自由1	190	f	ソーデンナー	デスナ	ん	
5	自由1	191	m	アモツキデスナー	デスナ	無	
6	自由1	191	f	ソーデンナー	デスナ	ん	
7	自由1	191	m	ワラワレマンニャケドモ	マスノヤ	ん	
8	自由1	191	f	ヨロシュゴワスワ	ゴワスワ	無	
9	自由1	191	f	スキデスワ	デスワ	無	
10	自由1	191	f	キャンナー	ヤスナ	ん	
11	自由1	191	m	ソーデスネヤ	デスネヤ	無	
12	自由1	192	f	ウレシュゴワッサー	ゴワスワ	っ	井上「ゴ ^レ ワッテ」. サ行子音微妙.
13	自由1	192	f	ゴワッセ	ゴワスエ	っ	井上「ゴ ^レ ワスエ」. 微妙.
14	自由1	192	m	ソーデスワナー	デスワ	無	
15	自由1	192	m	ツカシマンネン	マスネン	ん	井上「ツカシマンノヤナ」. 「ツカシマンネンワシラ」と続くように聞こえる.
16	自由1	192	f	ソーデッシャロ	デスヤロ	っ	
17	自由1	192	f	イーヤスモンナー	ヤスモン	無	
18	自由1	192	f	ドンナリヘンワ	マセン	へ	ナリマヘンのマ が脱落
19	自由1	192	m	オショーガツデスワナ	デスワ	無	

関西方言におけるデスマス体の転訛形についての試論

ー							
20	自由1	192	f	ソーデンガナー	デスガナ	ん	
21	自由1	193	f	ソーデンガ	デスガ	ん	
22	自由1	194	f	ワラワレヤンネンケド ナ	ヤスネン	ん	NHK「ケトモナ」. 井上「ケトナ」.
23	自由1	194	f	ヨロシーゴワスワ	ゴワスワ	無	
24	自由1	194	m	ソーデスナー	デスナ	無	聞き取り困難.
25	自由1	195	m	ソーデスワナ	デスワ	無	
26	自由1	195	m	ナンスナ	デスナ	で抜	
27	自由1	195	f	オムシデッシャー	デスエ	っ	NHK「デッシャー」. 井上「デッシャー」.
28	自由1	196	f	カエマヘンノデンガ	マセン	へ	
29	自由1	196	f	カエマヘンノデンガ	デスガ	ん	
30	自由1	196	f	ゴワンナー	ゴワスナ	ん	
31	自由1	196	f	ソーデッケド	デスケド	っ	
32	自由1	196	f	ベツデスワ	デスワ	無	
33	自由1	197	m	アラシマヘンヤロ	マセン	へ	
34	自由1	197	f	オマースワ	マスワ	無	NHK「オマスワ」. 井上「オマースワ」.
35	自由1	197	m	ヤラシメヘンヤロ	マセン	へ	
36	自由1	197	f	ソーデッカ	デスカ	っ	
37	自由1	197	m	イーマスクドナ	マスクド	無	
38	自由1	198	m	ヨーカマデヤソーッス ネ	デスネ	で抜	
39	自由1	198	f	ソーデッカ	デスカ	っ	
40	自由1	198	f	ソーデッカ	デスカ	っ	
41	自由1	198	m	キマンネ	マスネン	ん	
42	自由1	198	f	シテアンネヤケド	ヤスネヤ	ん	NHK「シヤンノヤケ ト」. 井上「シ アンノヤケト」. NHK

							注でも裨に近いとある。
43	自由1	199	f	シヤンネヤワ	ヤスネヤ	ん	早口。
44	自由1	199	f	トーカエベスサンデス ヨッテニナー	デスヨッテニ	無	
45	自由1	199	m	ソーデスセン	デスエ	無	微妙（促音の一步手前）。
46	自由2	200	f	オミヤスナ	オーヤスナ	無	スはフに近い。
47	自由2	200	f	イキヤンネケドナー	ヤスノヤ	ん	NHK「イキヤノヤケドナー」、井上「イキヤノヤケドナー」。
48	自由2	200	m	ソーデンノヤ	デスノヤ	ん	NHK「ソーデンナヤ」、ナ・ネ・ノの判定困難。
49	自由2	200	f	イキヤフネケドナー	ヤスネン	ふ	NHK「イキヤフノヤケドナー」、井上「イキヤフノヤケドナー」。
50	自由2	201	m	ソードスカ	ドスカ	無	
51	自由2	201	f	キマスシナー	マスシ	無	
52	自由2	201	f	チガイデンナー	デスナ	ん	
53	自由2	201	m	ソーデッセ	デスエ	っ	
54	自由2	201	m	ノセラレマンネ	マスネン	ん	
55	自由2	202	f	ソーデッセ	デスエ	っ	
56	自由2	202	f	デッケド	デスケド	っ	
57	自由2	202	f	デケマシタンデンガ	デスガ	ん	
58	自由2	202	f	エライコトデッセー	デスエ	っ	
59	自由2	203	f	ニジューゴセンデンガ ナー	デスガナ	ん	
60	自由2	203	m	タカスギマッセ	マスエ	っ	
61	自由2	203	f	トリハリヤンネンガナ	ヤスネン	ん	NHK「トリハリヤノヤガナ」。

関西方言におけるデスマス体の転訛形についての試論

62	自由2	203	m	ソーデスカ	デスカ	無	
63	自由2	203	f	ソーデショッテニ	デスヨッテニ	拗音化	
64	自由2	203	f	エーライコッテッセ	デスエ	っ	
65	自由2	204	m	ソードスワ	ドスワ	無	デ ^h ス ^h にも聞こえる.
66	自由2	204	f	ソーデンガ	デスガ	ん	
67	自由2	204	f	(ソーデスソーデス あるいはソレソレ)	×	×	NHK「ソーデ ^h ス ^h ネ」 井上「ソーデ ^h ス ^h カ」. 聞き取り困難だがソが2回聞こえる.
68	自由2	204	f	カワッタモンデスワ	デスワ	無	
69	自由2	205	m	ソーッスエ	デスエ	で抜	NHK「ソーセ」.
70	自由2	206	f	デヤンネン	ヤスネン	ん	NHK「デ ^h ヤ ^h ネ」. 井上「デ ^h ヤ ^h ネ」.
71	自由2	206	f	オタヤンデッシャンナ	デスヤン	っ	
72	自由2	207	f	ソーデンガナ	デスガナ	ん	
73	自由2	207	f	ナツカシゴワスワ	ゴワスワ	無	
74	自由2	207	m	ソーデスナー	デスナ	無	NHK「ソー ^h ス ^h ナー」. 井上「ソー ^h ス ^h ナー」. デスは早口で弱い.
75	自由2	207	f	カワッタモンデスワ	デスワ	無	
76	・朝	208	f	ゴワンナ	ゴワスナ	ん	
77	・朝	208	f	サイデッカ	デスカ	っ	サ ^h デ ^h ッカとも聞こえる.
78	・朝	209	f	オコシヤスカ	オーヤスカ	無	NHK「オ ^h コ ^h ヤ ^h スカ」. 井上「オ ^h コ ^h ヤ ^h スカ」. ス摩擦曖昧.
79	・朝	209	m	ソーデフナ	デスナ	ふ	

80	・朝	209	f	ヨーカデンネ	デスネン	ん	
81	・朝	209	m	ソーデッカ	デスカ	っ	
82	・朝	209	m	オモーテマスケレドモ	マスケレドモ	無	
83	・朝	209	f	サイデッカ	デスカ	っ	サデッカとも聞こえる.
84	・朝	210	f	イタダキマッシュotte	マスヨotte	っ	NHK「マッotte」.
85	・朝	210	f	オモイマスノンデナ	マスノンデ	無	NHK注の通り スの摩擦弱い.
86	・朝	210	f	シトオクレヤスナー	オ-ヤスナ	無	NHK「シト-クレ ヤスナー」. 井上「シ トオクレヤスナー」. ス 摩擦曖昧.
87	・朝	210	m	ソーデンナー	デスナ	ん	
88	・朝	210	m	イタシマヒョカ	マショカ	ひ	
89	・朝	210	f	サヨデッカ	デスカ	っ	
90	・朝	210	f	モライヤッサ	ヤスワ	っ	
91	・夕	211	f	イタダキマスデ	マスデ	無	スの摩擦弱い.
92	・夕	211	f	ゴザイマスワ	ゴザイマスワ	無	
93	・夕	211	m	オカエリデッカ	デスカ	っ	
94	・夕	211	m	ゴワヘンカ	ゴワセン	へ	
95	・夕	211	f	ゴザリマスワ	ゴザリマスワ	無	井上「ゴザイマ スワ」.
96	・夕	211	m	オヒサシブリデッサカ イ	デスサカイ	っ	井上「オヒサシブリ デッサカイ」.
97	・夕	211	m	シトクレヤンナ	オ-ヤスナ	ん	
98	・夕	211	f	ゴザリマスエ	ゴザリマスエ	無	エは非常に弱 い.
99	・夕	211	f	オリマスデ	マスデ	無	
100	・夕	211	f	ゴザリマッシュローテ	ゴザリマスヤ ロ	っ	井上「マッシュロー テ」.

関西方言におけるデスマス体の転訛形についての試論

101	・夕	211	m	ゴワヘンケド	ゴワセン	へ	
102	・夕	211	m	シトリマスンデッセ	デスエ	っ	
103	・夕	212	f	ゴザイマセン	ゴザイマセン	無	
104	・夕	212	f	サンジマスデ	マスデ	無	ス摩擦弱い.
105	・夕	212	f	ゴザイマスサカイニ	ゴザイマスサ カイニ	無	
106	・夕	212	f	イタダキマスデ	マスデ	無	ス摩擦弱い.
107	・夕	212	f	ゴザリマスヨッテニ	ゴザリマスヨ ッテニ	無	
108	・夕	212	m	ソーデッカ	デスカ	っ	
109	・夕	212	f	イタダキマスヨーニ	マスヨーニ	無	
110	・夕	212	m	ナリマスヨッテニ	マスヨッテニ	無	
111	・夕	212	m	ツケトクレヤスナ	オーヤスナ	無	井上「ツケトクレヤッ ー」. 聞き取り 困難.
112	・夕	212	f	イタダキマスヨーニ	マスヨーニ	無	
113	・道	213	f	オコシヤンノンデ	オーヤスノン デ	ん	NHK「オコシアソ ンデ」. 井上「オ シソソソソ」. Hの 摩擦が聞こえる かも.
114	・道	213	m	ヒサシブリデスナー	デスナ	無	
115	・道	213	f	サヨーデッシュェナー	デスエ	っ	
116	・道	214	m	オリマスケレドモ	マスケレドモ	無	
117	・道	214	m	オヨロシゴザイマスカ	マスカ	無	
118	・道	214	f	オリヤスネン	ヤスネン	無	
119	・道	214	m	ソーデッカ	デスカ	っ	井上「ソーデン ガ」.
120	・道	214	f	オコシヤスネ	オーヤスネン	無	

121	・道	214	m	デカケマシンスケド モ	デスクレドモ	で抜	デがわずかに聞こえそう.
122	・道	214	f	サイデッカ	デスク	っ	
123	・道	215	f	サンジマスノンデスケ ドナ	マスノンデス	無	ス摩擦弱い.
124	・道	215	f	サンジマスノンデスケ ドナ	デスクド	無	
125	・道	215	f	オモイヤスネケド	ヤスネン	無	NHK「オモイヤスノヤケド」.
126	・道	215	m	ソーデンナー	デスナ	ん	
127	・道	215	f	オクレヤスナー	オーヤスナ	無	ス摩擦弱い.
128	・買物	216	f	オジャマハンデヒケド ナー	デスクド	ひ	
129	・買物	216	f	ゴアンネケドモ	ゴワスネン	ん	
130	・買物	216	f	ソーデンナ	デスナ	ん	
131	・買物	216	f	オモテヤンネケドモ	ヤスネン	ん	
132	・買物	216	f	コッテッシャロナー	デスヤロ	っ	
133	・買物	217	m	ソーデスナー	デスナ	無	
134	・買物	217	m	ハンナリシスギヤシマ ヘンカ	マセン	へ	
135	・買物	217	f	サイデッシャロカー	デスヤロ	っ	
136	・買物	217	f	ハデズキデッショッテ ニナー	デスヨッテニ	っ	
137	・買物	217	f	シマスノデショッテ	デスヨッテ	拗音 化	スはフに近い.
138	・買物	217	f	オタノモーシマスワ	マスワ	無	
139	・買物	217	f	ナリマスデスイナー	デスイナ	無	マスのスはフに近い.
140	・買物	218	m	ソーデスナー	デスナ	無	

関西方言におけるデスマス体の転訛形についての試論

141	・買物	218	m	ハリマスネヤケドモ	マスネヤ	無	NHK「ハリマスノヤケドモ」．井上「ハリマスニヤケドモ」．ネヤは早口．
142	・買物	218	f	サイデッカ	デスカ	っ	
143	・買物	218	m	ドーデッシャロ	デスヤロ	っ	
144	・買物	218	f	サイデッカ	デスカ	っ	
145	・買物	218	f	ケッコードスワ	デスワ	無	
146	・買物	218	f	イタダキマッサ	マスワ	っ	
147	・買物	218	f	オクレヤスナー	オーヤスナ	無	
148	・送り	219	m	イッテキマッサ	マスワ	っ	
149	・送り	219	f	オコシヤッカ	オーヤスカ	っ	
150	・送り	219	f	オヨリヤスコト	オーヤスコト	無	
151	・送り	219	f	オワスレヤンナヤ	オーヤスナヤ	ん	NHK「オワスレヤンナヤ」．井上「オワスレヤンナヤ」．
152	・送り	219	m	ヨッテキマッサ	マスワ	っ	
153	・送り	220	f	ゴブサタシテヤンネ	ヤスネン	ん	
154	・送り	220	f	イタダキマスヨーニ	マスヨーニ	無	
155	・送り	220	f	オデマシダッセ	ダスエ	っ	
156	・送り	220	f	アンジョシトーマッカ	マスカ	っ	
157	・送り	220	m	イテキマスワ	マスワ	無	
158	・迎え	221	f	ソーデッカ	デスカ	っ	
159	・迎え	221	f	スイテヤッシャロケドモ	ヤスヤロ	っ	
160	・迎え	221	f	ワイテアンノンデッセ	デスエ	っ	
161	・迎え	221	m	イレテモライマスワ	マスワ	無	井上「イレテモライマスワ」．微妙．
162	・迎え	221	f	サイデッカ	デスカ	っ	
163	・迎え	221	f	アンデッカ	デスカ	っ	

164	・迎え	221	f	サイデッカ	デスカ	っ	
165	・迎え	222	f	ミテサンジマスワ	マスワ	無	マツに近く聞こえる.
166	・迎え	222	f	オマチヤシテオクレヤ ツシヤ	オーヤスヤ	っ	NHK「オクレヤツ」.
167	・迎え	222	f	オカゲンデスワ	デスワ	無	
168	・迎え	222	f	ナガシヤッサ	ヤスワ	っ	
169	・迎え	222	m	イレテモライマツサ	マスワ	っ	
170	・不祝儀	222	m	ビクリーシテオリマ スヨナ	マスヨーナ	無	
171	・不祝儀	223	m	ゴザイマヘナンダソー デ	ゴザイマセナ ンダ	へ	
172	・不祝儀	223	m	ゴザイマツシャロナー	ゴザイマスヤ ロ	っ	
173	・不祝儀	223	f	ジミヨーデゴザイマツ シャロ	ゴザイマスヤ ロ	っ	
174	・不祝儀	223	f	ゴザリマスノンデ	ゴザリマスノ ンデ	無	
175	・不祝儀	223	f	モーシアゲマスデ	マスデ	無	
176	・不祝儀	224	m	ゴザイマスンデスケレ ドモ	ゴザイマスン デスケレドモ	ノ→ ん	結果として、ス の転訛無し.
177	・不祝儀	224	m	ゴザイマスケレドモ	ゴザイマスケ レドモ	無	
178	・不祝儀	224	m	ヨロコンデオリマスデ	マスデ	無	
179	・不祝儀	224	f	ゴザイマスヤロ	ゴザイマスヤ ロ	無	
180	・不祝儀	224	m	ゴザイマスヨツテニ	ゴザイマスヨ ツテニ	無	
181	・不祝儀	224	m	ナリマスデツシャロケ レドモ	デスヤロ	っ	

関西方言におけるデスマス体の転訛形についての試論

182	・不祝儀	224	m	ヨロシゴザイマッシャ ロカ	ゴザイマスヤ ロ	っ	
183	・不祝儀	225	f	オソレイリマスデ	マスデ	無	
184	・不祝儀	225	f	ゾンジマスデ	マスデ	無	
185	・祝儀	225	f	ゴザイマヘンデッカイ ナー	ゴザイマセン	へ	
186	・祝儀	225	f	ゴザイマヘンデッカイ ナー	デスカイナ	っ	
187	・祝儀	225	f	オリマスノデンノヤワ	デスノヤ	ん	ノヤはネヤにも聞こえる。
188	・祝儀	226	m	モーシワケゴザイマセ ン	ゴザイマセン	無	
189	・祝儀	226	m	ワカリマヘンノヤケド	マセン	へ	
190	・祝儀	226	m	オモイマスンデナー	マスンデ	ノ→ ん	結果として、スの転訛無し。
191	・祝儀	227	f	ナリマヘンノンデ	マセン	へ	NHK「ナリマヘンデ」。
192	・祝儀	227	f	ゴワンノヤケド	ゴワスノヤ	ん	
193	・祝儀	227	f	デトリマスモンデ	マスモンデ	無	モンは形式助詞。
194	・祝儀	227	f	ゴザイマスノンデナ	ゴザイマスノ デ	無	NHK「ゴザイマスデナ」。
195	・祝儀	227	f	ゴザリマスネケドモ ン	ゴザリマスネ ン	無	
196	・祝儀	227	f	ゴザイマヘンデ	ゴザイマセン	へ	
197	・祝儀	227	f	ゴザイマスネケドモナ ン	ゴザイマスネ ン	無	
198	・祝儀	227	f	ゴザリマスノデ	ゴザリマスノ デ	無	スの摩擦は弱い。
199	・祝儀	227	f	イタダキマスヨーニ	マスヨーニ	無	
200	・祝儀	227	m	ソーデスカ	デスカ	無	

201	・祝儀	227	m	モーシワケゴザイマセ ン	ゴザイマセン	無	
202	・祝儀	227	m	イタダキマスデ	マスデ	無	
203	・祝儀	227	f	ゴザイマスケレドモ	ゴザイマスケ レドモ	無	NHK「ケドモ」. 井上「ケドモ」. レ弱い.

上記の表における項目は、左から、出現順に付けた連続番号、談話の種類（『NHK』におけるタイトルを簡略化）、『NHK』における掲載頁、話者（男女1名ずつなのでfとmで表した）、抜き出した文節（修正済みのもの）、機能語部分の原形（非転訛形）、転訛のタイプ、備考、である。

転訛のタイプは、「ス語尾の促音化」を「っ」、「ス語尾の撥音化」を「ん」、「否定形におけるサ行子音の摩擦の弱化（セン→ヘン）」は「へ」、転訛しなかったものは「無」、デスのデの部分脱落したものは「で抜」、デスのスの部分がフに近く聞こえたものは「ふ」、のように表している。

備考欄には、微妙な聞こえについての情報や、NHKテキストとの異同および井上氏テキストとの異同を載せた。異同は次の方針で掲載している。

- ・ NHK テキストと筆者聞き取りが異なる場合。→備考欄に NHK テキストと井上氏テキストの両方掲載。
- ・ 井上氏テキストのみ異なる場合。→備考欄に井上氏テキスト掲載。
- ・ NHK テキスト、井上氏テキスト、筆者聞き取り結果が一致。→備考欄に掲載無し。

ただし文末の長音の異同については（例：「ナー」と「ナ」など）、今回の分析対象としないので特に注記せず、基本的にNHKテキストのままにしている。

【編集後記】

『現象と秩序』第6号をお届けします。巻頭の村中論文は、関西方言に関する研究です。本誌は、『執筆要領』にもあるとおり、人文科学・社会科学の多くの領域の議論に開かれています。また、抜刷代わりに著者の方にはPDF版の配布をおこなっており、そのコピー及び再配布は自由となっております。ふるってご執筆ください。2番目の榎田論文は、『保健医療社会学論集』27巻2号に掲載された「論文投稿支援ワークショップ」実施報告の4論文に関しての、コメントをまとめたものです。『保健医療社会学論集』の当該号は、2018年9月まではWEB公開されませんが（公開までの期間の短縮を検討中）、全国の多くの大学図書館には所蔵されています。本論文と一緒に見て頂けるとより活用しやすくなると思われます。3番目の山田・榎田論文は、吃音に関しての社会学的研究です。病因論や治療論とは別の社会学的研究が吃音に関して可能であることを証明しようとした論文です。「表1」だけでも見て、興味をもった「吃音者の工夫」に関して、その該当箇所を読んで頂けると幸いです。吃音はコミュニケーションの障害なので、その症状も、症状に対処するための工夫も、いずれも社会（学）的現象なのです。新領域開拓的研究は、本誌の得意とするところです。ご堪能下さい。最後の山崎・榎田論文も、新領域開拓的研究として載せています。日本語の文法や語彙が完全ではないインタビューイヤーであったとしても、使える資源を総動員して、意味の会話的達成を行おうとしています。その努力に応える社会学をなんとか構想し、実践したいと考えて書きました。

次号には、「学園都市的食文化を考える」という特集（仮題）が組まれる予定になっています。また、単発の論文としては、家族内会話をめぐる分析、車イスバスケットボール研究、ALS在宅療養研究等が載る予定です。ご期待ください。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2017年度）

編集委員：榎田美雄（神戸市看護大学）、中塚朋子（就実大学）、堀田裕子（愛知学泉大学）

編集幹事：坂根杏奈（神戸市外国語大学）、平田菜津子（神戸市外国語大学）

編集協力・印刷協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第6号（第3版）

※改訂箇所：第1論文の表7と表9が頁をまたがっていたため行送りを修正した。（第2版）

改訂箇所：第1論文の表10と表12に「網掛け」が欠落していたのを復旧した。（第3版）

2017年 3月31日発行→2017年11月14日第2版発行（WEB版のみ、11～13頁のみ改訂）

→2019年2月22日第3版発行（WEB版のみ、13,14頁のみ改訂）

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 榎田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074（榎田研）,e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>